
私達の約束

アンネン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私達の約束

【Nコード】

N9475M

【作者名】

アンネン

【あらすじ】

ハナダジムでのんびりしていたカスミ、ハルカ、ヒカリだったがテレビでサトシが人を助けようとして列車にひかれてしまい死亡した。カスミ達は、泣いてしまう。そんな時カスミ達の目の前に現れたのは・・・

(1)

ここは、ハナダジム。水系ポケモンのジムである。今日は、ジムはお休めでジムリーダーカスミの部屋には、ハルカとヒカリがカスミの家に遊びに来ていた。

ハルカ「ごめんねカスミ。突然押しかけちゃたかも」

カスミ「別に気にしてないわ」

カスミは、もって来た麦茶をハルカ、ヒカリに渡す。

ヒカリ「ふゝところでカスミは、サトシのこと好きなの？」

ヒカリの問いに思わずびっくりするカスミ。

カスミ「何よいきなり」

ハルカ「私も聞きたいかも」

カスミ「ハルカまで」

ヒカリ「ねえどうなの？」

二人の問いに戸惑うカスミ。するとたまたまそばにあったテレビのリモコンを足でふんずけて電源が入る。ちょうど夕方のニュースが始まったときだった。

チャララチャラララチャチャチャチャラララ　ニュースの始まり曲

女子アナ「こんにちわ。夕方のニュースをお伝えします」

ハルカ「ニュースなんてつまらないから変えるかも」

ハルカは、別のチャンネルに変えようとしたときだった。

女子アナ「先ほど入ってきた情報です。今日昼過ぎJRカントー線のラーフォーラ駅の踏切内に自殺しようとした10代後半女性が踏み切りに入りそれを止めようとした少年がラーフォーラ駅を通過しようとした快速列車にひかれ自殺しようとした女性は、軽傷、女性を助けた少年は、一時意識不明の重体でしたがさきほど午後4時死亡しました。亡くなったのは、先日シンオウリーグで優勝したマサ

ラタウンのサトシさんです」

その言葉にカスミは、麦茶をこぼしてしまった。

カスミ「ウソ・・・でしょ」

カスミは、もちろんハルカ、ヒカリも信じたくは、なかった。

ハルカ「サトシ・・・サトシ」

ヒカリ「サトシ」

ハルカとヒカリは、信じたくないのになぜか涙が出し泣いてしまう。もちろんカスミも例外では、ない。カスミは、泣きは、しなかったが涙が止まらなかった。

(2)

その情報は、カスミ達以外も耳にする。

タケシは、カスミと同様テレビで知り、シゲルは、いじていったパソコンで知り、ヒロシは、新聞の号外で、マサトは、ジムリーダーセンリから聞き、ヤストシは、大都会にある字幕速報で知った、そしてケンジは、オーキドの話で知った。もちろんこの人たちもカスミ達同様信じたくは、なかった。

一方カスミ、ハルカ、ヒカリは、サトシの遺体が保管されている病院に訪れていた。3人は、サトシの遺体を見てそれが全て事実であることを知る。

ハルカ「サ、サ、サトシ」

ヒカリ「サトシ」

ハルカとヒカリは、再び泣き始めた。

カスミ「サトシ、どうしてどうしてせっかくポケモンマスターに1歩近づいたのに何で死んじゃたのよ。私は、私は・・・」

カスミは、好きだていいたかたがこらえきれず泣いてしまったのであった。

その後ヤストシたちもやってきた。もちろんカスミ達同様涙を流す人もいった。でも一番泣いてたのは、サトシのお母さんかもしれない。1人息子がこのような姿で死んでしまったことに・・・

カスミは、自殺しようとした女性をひどく恨んでいた。この人が自

殺し泣ければサトシは、列車にひかれることは、なかったと・・・
どうしてひどくこんな風に恨んでるのかというと知ってのとおりサ
トシは、正義感が強く見て見ぬふりができない性格の持ち主である。
その性格は、いつか災いをもたらすんじゃないかとカスミは、日ご
ろ心配してたがそれがついに来てしまったのだ。

ハルカ「帰ろうかカスミ」

カスミ「・・・・・・」

カスミは、言葉が出ずそのままハルカ、光とともにハナダジムへと
帰っていく。

(3)

その夜カスミは、まだ泣いていた。

ハルカとヒカリが懸命になぐさめるもカスミは、泣き止まなかった。
カスミにとって一番大切な人を失ってしまったのだから。

カスミ「サトシのバカ……約束、したじゃないの……！嘘つかない
でよ、約束、守ってよ……！！」

ハルカとヒカリを気にせず泣き続けるカスミにハルカとヒカリは目
を伏せた。きつとハルカとヒカリは、カスミのサトシに対する想い
に気付いていたんだ。どんなに滑稽な姿だったのだろう。でも、泣
かずにはいらなかった。

だって、カスミは、サトシのことが。

カスミ「サトシ、サトシ、サトシ……！」

シーツに沈めた顔をくしゃくしゃにして嗚咽を漏らしていたときで
ある。どういふことか頭上から、あの愛しい声が降ってきた。

「……そんなに泣くなよ。カスミお前のそんな姿もう見たくない」
慌てて目を擦る。ぶんぶんと頭を振って、もう1度目を開ける。

「……てんだよ……まあ、無理もないか。こんな姿だしな」

そこには、愛しい愛しいサトシが、ふよふよと浮いている姿があっ
た。

(4)

今になって考えると、カスミの前にいるサトシを見てさほど驚きは

しなかつたんだ。

だって、この想いは本物。これだけ溢れているのだから、サトシに再び会えてもおかしくはないのだと。それだけカスミは、サトシに落ちていたんだね。

カスミ・ハルカ・ヒカリ「えっ、ええっ!？」

カスミだけでは、なくハルカとヒカリも驚く。

あたふたとしているカスミに、少しだけ透けふよふよと浮いているサトシのほうが、口を開いた。

サトシ「お前な、俺に会いたかつたんだろ？仕方ないからこーやって化けて出てきてあげたんだよ」

この憎まれ口は、確かにサトシだ。

カスミの大好きな、あのサトシに間違いない。

そう確認すると、カスミはいつも通りに話すことができた。

カスミ「別にあんたに会いたかつたわけじゃ・・・」

ハルカ「素直になりなさいよカスミ」

ヒカリ「せっかくサトシが幽霊の姿であいにきたのに」

ハルカとヒカリが反論する中サトシがこういった。

サトシ「さて、話は戻るけど。嘘ついてもムダだぜ。お前は、俺に本当に会いたかつたんだろう？だって、カスミが俺のキスで目覚めたようなモンだから」

ヒカリ「カスミいつの間に!」

ハルカ「カスミだけずるいかも」

ヒカリとハルカが悔しがる中カスミは、あることを疑問にする。

カスミ「サトシどうして私だけじゃなくハルカとヒカリまで見えるの」

そこをたずねるとサトシが話す。

サトシ「ハルカとヒカリが俺のあと追って死のうと考えてたからカスミだけじゃなくハルカ、ヒカリにも見えるようにしたんだ」

ヒカリ「どうして」

ハルカ「わかちやたかも」

サトシ「俺は、幽霊だぜ。心の中でなに考えてるのかおみとうしだぜ」

その発言にヒカリとハルカが引く。
カスミ「ところでサトシ。化けて出てたからには、他に何かあるのかな」

カスミの鋭い質問にサトシは・・・

サトシ「俺は、おまえが夢である水ポケモンマスターになるのを見届けたかったしそれに・・・」

カスミ「それに？」

サトシ「お前と一緒にもう一度旅したかったんだ」

カスミ「サトシ・・・」

カスミは、とても嬉しかった。しかしヒカリとハルカが黙っては、いなかった。

ハルカ「ちよつと待った。私達は、どうなるのよ」

ヒカリ「私もサトシと旅がしたい」

二人は、文句を言うサトシがこんな風に言い返した。

サトシ「いいけど・・・その代わり体を貸してくれるか。俺は、今は、幽霊だし人の体に移ることぐらい出来るんだから」

その言葉にヒカリとハルカは、反論した。

ヒカリ「大事な女の子の体に触らせてたまりますか」

ハルカ「同感かも」

そういつて二人は、出ていた。

カスミ「サトシ・・・」

サトシ「カスミ違うんだよ。あれは、二人を追いつ出す口実なの」

カスミ「え!？」

サトシ「乗り移れることには、乗り移れるけどああでも言わないとついてくるからなああの二人」

カスミ「サトシ」

カスミは、嬉しくてたまりませんでした。

葬儀当日、サトシは、ハナダのカスミの部屋から足を出そうとはしなかった。

あの日以来カスミの家で共に生活していたサトシだったが、この日だけは1歩も外へ出なかった。

サトシが行かないなら私も行かないと言ったのだが、サトシは許してくれなかった。

サトシ「俺が見届ける訳にはいかないし俺の最後、お願いだからカスミが代わりに見届けてくれ」

葬儀中は何とも微妙な心中だった。サトシの遺影、サトシの骨。どれをとってもカスミの頭には疑問ばかり。だってサトシは、そこにいるじゃないか。皆の啜り泣く声を、遠くで聞きながら、問いを投げ続ける。ハルカとヒカリは、カスミと同じ気持ちであった。

それから月日が経ったある日のこと。

ヤストシ「エブチ博士またくだらないものを作った拳句これなの」
エブチ「仕方があるまい。この人型ロボット失敗作じゃよ」

ヤストシ「またつく」

そういつてエブチとヤストシがロボットを捨てて行き帰っていた時カスミは、その人型ロボットを持って家へと帰った。

サトシ「どうしんだカスミそんなもの」

カスミ「これ。エブチ博士がもういらなからといって捨てていったロボットさ。この中にサトシが乗り移ればと思ってきたのよ」

サトシ「カスミ・・・」

カスミの言葉に嬉しかったサトシ。幸いロボットは、男性型でしかもイケメンであった。

サトシ「よし」

サトシは、ロボットに乗り移った。

サトシ「結構性能いいこのロボット」

カスミ「さすがわエブチ博士だわ」

サトシ「これなら旅へ行けるぜ」

サトシは、嬉しそうにいった。

カスミ「それじゃいくか」

サトシ「どこへ行くんだところで」

カスミ「うゝん」

サトシの発言にかすみは、どこへ行こうか迷い始める。

すると一枚の紙がそばに落ちた。

カスミ「そうだインシュ行こう」

サトシ「インシュ?」

カスミ「うん」

サトシ「それじゃ行くか」

そういうと支度し始めるカスミ。

忘れては、いたがピカチュウは、サトシの死後カスミとともに過ごしていた。

カスミ「ピカチュウこのロボットは、エブチ博士が作った初期男性型ロボットよ。名前は、サトシ」

サトシ「よろしくなピカチュウ」

ピカチュウ「チャッ」

カスミ「それじゃあインシュへ向けて出発」

サトシ「おー」

こうしてサトシとカスミは、インシュへ向けて出発した。

姿、形は、変わってしまったても性格は、同じ愛する二人の中は、けして消えることは、なかった。

ヒカリ「カスミめ」

ハルカ「ずるいかも」

ヒカリ「よし私達もこっそりついて行こう」

ハルカ「賛成かも」

そしてサトシとカスミのあとを追うヒカリとハルカであった。

終わり

（後書き）

（
いやこの話を作るのに苦労しました。とく悲しむシーンや感動の
シーンが疲れました。あと連載も今後予定しています。お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9475m/>

私達の約束

2010年10月14日01時39分発行